

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	女性ファッション雑誌にみられる色彩表現に関する比較研究
Author(s)	スリ ブディ ルスタリ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期 : 11 - 20
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038885
Right	
Relation	



女性ファッション雑誌にみられる色彩表現に関する比較研究

スリ ブディ ルスタリ

1. はじめに

日本語の中では「青い」、「黄色」、「黒い」、「白い」、「桃色」などの日本語の色彩名の他、「ブルー」、「イエロー」、「ブラック」、「ホワイト」などの英語から入って来た外来語の色彩名も存在している。そのため、それぞれの色彩名においてミニマルペアができた。いいかえれば、「青い」と「ブルー」や「黒い」と「ブラック」などとの関係は類義関係になっている。類義関係と言うのは意味が似ているあるいは共通する多くの弁別特徴（他の語と区別できる特徴）を持つ二つの語か二つ以上の語の関係のことである。指し示し方によって、上位語や下位語や同位語や同義語という様々な類義関係があつて、その中で語と語との間にほとんど区別する弁別特徴を持たなくて、指し示す対象の範囲も同じであるものは同義語と呼ぶ。

日本語の色彩名と外来語の色彩名との間は、例えば「青い」と「ブルー」は指し示す対象の範囲あるいはそれぞれ指している色の内容は同じだから、同義関係になっていると思う。しかし完全な同義語は存在しないと言われる。どんな語であっても必ずその語は他の全ての語から区別する特徴を持っているからである。それに、類義語が存在するという事は、そこに使い分けをしたいという何らかの要求があるからだと思われる。どうして使い分けが必要なのか、類義関係にある二つの語の間にその意味や語感に何らかの違いがあると感じられ、その感じに従って自分の考えや言いたいことを適当に表現するためには、Aの語ではなく、Bの語でなければならないと判断するからである。色彩に関する類義語、この場合同義語も例外ではない。ある場合や文脈に応じて日本語か外来語の方が相手に伝えたいことはぴったり伝わられる。どんな語でも話し手だけでなく聞き手も語から感じる特定の感情を持っているはずだ。読む人や聞く人の興味を引くために、ある語を使う前に二つ以上の類義語からそれぞれの語が起こす感情を知った上にぴったりの一つの語を選択して使う場合が多い。

外来語の色彩名が存在するため、ものの色を表す時に日本語だけでなく外来語も使えるようになってきた。それぞれの語自身が聞く人や読む人の心に何らかの特定の感情を起こすという性質を持っていて、ある語は他の語とその性質が共通しないと思われるから、簡単にお互いに言いかえられない場合が多いと思う。指示的意味から見て、更に言葉の語感というものは特に話し言葉において、個人的な差異があるので人の都合や好みによって勝手に言いかえられる場合も少なくないと思いますが、他の類義語と同様、語が持つ語感を

知って考えをちゃんと伝えるためとか相手の心を引くためにわざと日本語ではなくて外来語を使うという語の選択の必要もできたと言えるだろう。

外来語は漢語や和語より若者に親しみのあるものだと感じられ、新しくて生き生きした感じがあるとよく言われるが、外来語の色彩もそうであるか。全ての外来語色彩名は共通する語感を持つか、またどういう時に外来語の方が日本語の方がよく用いられるか、さらにまた外来語のをあるいは逆に日本語のを使ったらおかしく感じられる場合があるのかというこれらの点について調べてみる。

日本語と外来語の色彩名はどのように適当に用いられるのか、それらの語がよく見られる最近の女性誌から得られた例文を中心に考察を行う。集めて来た例文は女性の服やコスメなどの色を表すものに限られ、全体的に色彩語の使い方の分析は必ずできないため、この調査は女性誌における色彩語の使い方の調査であるもっと狭い範囲の調査にする。この調査によって少なくとも一つのちょっとした分野において色彩に関する傾向が見られ、上の疑問に対して答えが出て来ることを望んでいる。

2. 調査の方法

本調査で対象になる語は女性誌に見られる全てのものの色を表す色彩語ではなくて、日本語と外来語の使い分けを調べてみるから、日本語の色彩語とその語と同じ意味をしている外来語の色彩である。「ベージュ」や「オレンジ」や「ネイビーブルー」はその語を訳す以前から日本にあった日本語らしい日本の色彩語はないから、除外する。調査の対象になるものは次のとおり：

ホワイト	白い	イエロー	黄色
ブルー	青い	グリーン	緑色
ピンク	淡紅、桃色	ブラウン	茶色
ブラック	黒い	ゴールド	金色
グレー	灰色	シルバー	銀色
レッド	赤い	パープル	紫

上の諸語がついている文章や文句を取って、分析する。どういう場合あるいはどんなアイテムの色を表す時に外来語の方は用いられるか、同じく日本語のにもどういう使い方の傾向が見られることを調べる。データの参考出版物は女性のファッションをはじめ様々な女性に人気のあるアイテムを記載する月刊女性誌に限る。そういうマガジンには女性に親しみのある言葉遣いや分かりやすい語が主となって色彩に関する語も同じく女性に好まれると思われるものが選択される傾向があるだろう。

取り上げられる色彩語はものを表す具体名詞と直接に結びついて使われるものや「の」

助詞がついてくる「ブラウンの」や「紫の」のようなものである。すなわち、ものの属性を表す語である。そのほか、「赤を使う」、「色はブラウン」などのように、具体名詞と直接に結びつかないで使われるものを取り上げる。「真っ赤な」などのようなその色の程度を表すものや「黒っぽい」や「黄色っぽい」のような、ある程度その色が含んでいることを表すものは例に挙げられない。

3. 調査の結果

色彩語	数	色彩語	数
ホワイト	2	白	38
ブルー	20	青	3
ピンク	28	桃色	—
ブラック	7	黒	19
グレー	6	灰色	—
レッド	3	赤	32
イエロー	10	黄色	5
グリーン	19	緑	1
ブラウン	7	茶色	3
ゴールド	6	金色	—
シルバー	3	銀色	—
パープル	9	紫	2

「mina おしゃれピープルの定番マガジン」

6/20 2001 no. 7

色彩語	数	色彩語	数
ホワイト	14	白	50
ブルー	26	青	8
ピンク	44	桃色	—
ブラック	9	黒	67
グレー	9	灰色	—
レッド	9	赤	32
イエロー	4	黄色	8
グリーン	18	緑	3
ブラウン	36	茶色	5
ゴールド	59	金色	1
シルバー	19	銀色	1
パープル	17	紫	—

「KIREI ni naritai」2001年7月号

(1) 外来語

1. 全ての外来語の色彩語が見られる。所々数が少ないものもあるし、非常に多いものもある。ほとんどは洋風のものの色を表したり、洋風のもので特徴や属性を説明したりする。

例えば、

- ピンクのワンショルダー
- パープル、ピンクの寒色系メイクには似合わないので注意して
- グリーンのワンピース
- ブラウンのアイブロウもグレーのアイブロウしっくりこない髪色はどうしたら
- 時計だけをブルーにしたワンポイントテクもお見事
- 人気のグリーンでクリーンスタイル
- この夏はかわいらしくピンクでキメたい (T シャツ)
- グレーをテーマに、おしゃれスタッフがさすがの着こなしを。。。 (T シャツ)

スカート、シャツ、ワンショルダー、ワンピース、ノースリーブ、サンダル、キャミソリ、ベルト、ビキニなどの洋服とリップ、グロス、ネイル、チーク、マスカラ、アイライナー、アイシャドウ、などのメイクは全て外来語の色彩語を使っている。しかし、その中で、「ホワイト」や「レッド」や「ブラック」は「白」、「赤」、「黒」などと比べると後の方がよく見られる。この3セットの色彩語について後で考えてみる。

* 洋風のもの以外にも数が少ないけど、外来語を使う場合はある。例えば、

- 1枚はほしい！ロマンチックなピンクゆかた
- 帯は花の色を拾ってピンクをセレクト
- 紺 X ピンク & 振り袖でうーんと個性的に
- ピンクのラメひも
- キキョウの花に合わせて、帯もグリーン X パープルのものを合わせるとおしとやかな着こなしに
- パープルの花模がシック
- ひと目見るだけで、目を奪われちゃうひまわり柄がインパクトある。帯ももちろんイエローで統一して
- ブルーのかんざし
- グリーン半袖スエット
- グリーンの小物で色あわせを楽しんで
- グリーン小物を合わせて色あざやかにキメる
- ピンク系の肌の人におすすめ

(2) 日本語

一方、日本語の色彩名にはどんな傾向が見られるか。白、赤、黒のほか、日本語の色彩名は比較的少ない。それぞれの使い方を見てみよう。

「青」

1. 「青空柄ニットのドでかロゴはフロントがオゾンの0、バックがコミュニティのCになっている」

空の色を表すのに「青」を使っている。シャツ自体は青で、そのシャツの模様は空と0ロゴである。空の模様には所々白があるが、ベースの色が青い。この場合、「ブルー」より「青」の方がぴったりだろう。青空という復語があるからである。

2. 「大好きな青でキメてくれたよ」

「mina スーパー読者」というコーナーで「いつも mina に登場してくれる女の子たちをキャッチ、大好きな青でキメてくれたよ」と言う文がある。その4人の女の子たちが皆同じ色を選んで、その色を指すのに日本語の「青」を使っている。

3. 「紺地のゆかたには、同系色の青系小物で落ち着きのある着こなしにしてもOKだし、」

これは「紺地のゆかた」というコーナーから取られた文。「やっぱり基本は、紺地！」という説明があるから、日本の伝統的なゆかたの基本色は紺であろう。日本語の「紺」と合わせるためにわざとブルーじゃなくて、「青」を使った。まだゆかたコーナーで他のページにも「ひんやり青」というタイトルで、その下に「暑い夏もひんやりしてきそうな柄にほればれ」文があるが、その次、「ブルーのコントラストで涼しさもきわだつね。」と書いてある。このコーナーでブルーはあまりないが、上のブルーは涼しいという気持ちのいいことを強調するために使われるだろう。国立国語研究所の行った外来語に対する好みについての調査の結果が、その好みとしては、新鮮さ、明るさ、実感の強さ、高級な感じなどげか数えられる反面に、不快な語感や連想を避けるという心理がはたらく場合もあるそうだ。

4. 「色の相性に注意を払って選んだのは、バニラアイスクリームのクリーミーな卵色、オレンジシャベットのみずみずしいオレンジ色、フローズンブルーベリーやラズベリーのフレッシュな赤、青」

5. 「ラズベリーのような鮮やかな赤のアイラインに、ブルーベリーの青を連想させるマスカラを合わせます」

上の青は二つともラズベリーとブルーベリーという果物を指している。

6. 「青い空、白い雲、美しいビーチに心がなごむ」

これは芸能人の旅行の感想文からとられた例文である。おそらく空、雲、木、雪などの自然のものの色を指す時に、日本人は外来語よりも日本語の方を使うかもしれない。

7. 「まずは、基本の色み（白、赤、黄、青、ピンク）のチェック」

これは「新・突撃体験レポート。パーソナルカラー診断」から取られた例です。このコーナーで洋服とメイクの話ではなくて、色と人の性格との関係の話で、具体的な色を分析するから日本語を使った方が伝いたいメッセージや考えはぴったりに伝われるのだろう。

8. 「ボーダーはTシャツのクラシックだけど、起源はスペインとフランス国境のバスク地方といわれる。そこの漁師たちが16世紀以来愛用してきたものがオリジナルで「バスクシャツ」とも呼ばれる。シルエットがバスク的だからという説と、赤や青や緑のボーダー柄がバスクの伝統柄だからという説がある。」

これも色そのものを話して、別に何らかの感じを起こす必要はないから、日本語の色彩名が選ばれた。

9. 「Cゾーンに青い光を重ねて、体温の低そう肌に」

光も自然のものだけど、この場合、たしかに日の光やランプの光などのあるものが起こした光でなくて、メイクによって人工的に作られた光である。それに、同じページには「薄くのぼすとブルーの光になってCゾーンにぴったり」という文もあるから「ブルー」と「青」の使い方は結びついている名詞とは関係なくと考えられる。

10. 「青いパール入りの下地を使い、さらに仕上げには淡いパールブルーのアイシャドウを。。。」

「桃色」

一つも見られない。その代わり、桃色と同じ意味を持つ「ピンク」が洋風のものかどうかが具体的な色を話すかどうかと関係なく用いられる。ピンクを訳する言葉は桃色の他、「淡紅」という色彩名があるが、これも見られない。広辞苑で調べたら、桃色の意味について、桃の花の色、薄赤い色、淡紅色という説明があつて、その次、男女間の情事に関することという語との説明も書いてある。おそらく桃色と言ったら、この感情的な意味の方が強く感じられるため使わない方がいいと思われるだろう。

「灰色」

灰色の使い方例には全然ない。

「黄色」

- 黄色TシャツでGO!
- 見るからにさわやかな淡い黄色のゆかた
- おとなしめの朝顔柄だから、帯は黄色で元気よく!
- 古風なうちわ柄を黄色の小物で愛らしく
- 黄色のシュシュ
- なかでもヒロインで肝臓病の少女のペンが着た黄Tシャツがおもしろかった

- 黄色コンパクトというだけでもうれしくなっちゃいそう。。。
- まずは、基本の色み（白、赤、黄、緑、青、ピンク）のチェック（*）
- この黄色なんてホント素敵
- さわやかな蛍光イエローが新鮮。肌なじみのいい黄色ベースなら、派手めデザインでもすんなり着られる。

イエローの使い方と比べてみよう

1. イエローのバッグ
2. イエローのイチゴ柄Tシャツ
3. 中に着たイエローTシャツ
4. 帯ももちろんイエローで統一して

例から見ると、黄色とイエローの使い方の範囲にはあまり差がない。日本の伝統的な服においても黄色とイエローは両方使われる。しかし、上の（*）例のように、具体的な色の話題を話す時にイエローでなくて、黄色を使った方が考えがちゃんと伝わるみたい。ここで言う具体的な色の話題とはその色彩語は名詞と直接に結びついて使われるあるいはものの一つの属性を表す語として使われるではなく、その色彩語が実際に指している色の話題である。

「緑」

1. 竹のようにさわやかな緑のゆかたには、お花のイメージさせるきれいな色の帯をチョイスして
2. 白地にきれいな緑の大木をプリントしたもので、シンプルなのにオシャレなシロモノ
3. 黄色の例の（*）と同じ
4. この夏の限定色のアイシャドウは暖色のピンク系と2色出ているのだけど、RiNDA的にはこの黄緑が気になります

例の1は「竹のようにさわやか」があって、何となく「緑」の方がぴったりで選択された理由が分かった。同じく2番も木の色を表すのに、もし「グリーン」が使われたらきれいさと新鮮さがあまり感じられないみたい。4番の黄緑の意味は黄色がかかった緑色で、意味的にはイエローグリーンも使われるかもしれないが、そのコンビネーションが辞書には載ってないので黄緑の方が読者に親しみのある言葉という感じがする。さらに、他の例にも「ウエストにさりげなくつけた黄緑のブローチも、。。。」文がある。

「金色」と「銀色」

それぞれが一つしか見られない。

「次は自分の肌に似合う、金属色のチェック。金色と銀色の布の上に手を置き、どちらがきれいに見えるかを調べる。」という文の中にあった。これも「似合う色を知れば、自分の内面までわかる!？」というテーマのパーソナルカラー診断から取られた例である。服やメイクにおいて、一つも見られない。

「紫」

二つしか見られない。

1. 帯もあざやか&シックな紫でポイント作りを
2. ちょっぴり背のびをして紫ベースの大胆な花柄に挑戦

どこにも見られない紫は「今年は急げ!!ゆかた計画」というコーナーでしか使われていない。

「茶色」

茶色はブラウンに比べて、ブラウンの方は使い方の頻度が多い。しかし、使い方の範囲から見ると、茶色もブラウンと同じ洋服やメイクの色を表すのに使われている。ブラウンの方が多いということはただこの色彩語は若者にもっと人気があると思われるかもしれないが、茶色とブラウンとはそれぞれの指している色の内容が違う可能性もあるかもしれない。それを確かめるために他の調査が必要だから、この小論文で話していかない。同じ傾向は青と黄色の使い方にも見られる。

「白」、「黒」、「赤」と「ホワイト」、「ブラック」、「レッド」

調査の対象になる女性誌にはいずれもホワイトやブラックやレッドに比べて、白、黒、赤のほうが使用頻度がずっと高い。この使用頻度の比較を見て、他の日本語の色彩名と違ってこの3つの日本語の色彩名は雑誌の全てのアイテムにおいて色を表すのに外来語のよりもぴったりでしゃれた感じがするようである。

ブラックマジックのような複合語は例にあげていない。「ブラック」はしばしば服とメイクにおいてみられ、一方「ホワイト」はメイクの方によく見られる。「オフホワイト」のような発生語も例にあげられない。雑誌に見つかった16語の内、14はメイクを表す語である。

4. まとめ

類義語が存在するという事は、そこに使い分けをしたいという何らかの要求があるからである。なぜ使い分けをするか、類義関係にある二つの語の間にその意味や語感に何らかの違いがあると意識し、その意識に従って、自分の考えを的確に表現するために、Aの

語ではなく、B の語でなければならないと判断するからである「国立国語研究所報告28 “類義語の研究”」。色彩語の場合は日本語のほか、外来語の色彩名も存在するため、ものの属性の一つである色を表すときに、日本人は場合や文脈に応じて、色彩語を選択してから使うようになってきたから色彩語においても類義関係ができたと言えよう。外来語の色彩は類義的な外来語とも言われ、他の類義的な外来語と同様非常に局限された場合にしか使われていない。外来語の色彩の方がしゃれた感じや明るさや魅力があると思われ、服飾の場面に盛んに使われる傾向があるようで、女性誌から色彩語を集めて調査を試みてきた。結果として次の傾向が見られる。

1. ブルー、ピンク、グリーン、ブラウン、ゴールド、シルバー、パープルのほうがそれらの語を訳する日本語よりもたくさん使われている。その中で桃色と灰色は一つも見つからなくて、金色、銀色、と紫は非常に少ない。青い空、白い雪、紫の花、黄色いすいか、灰色の建物などように、日本語の色彩は自然に関するものや表現と洋風のものではないのを表すときに使われるようである。しかし、ピンクの桜、ピンクの紙などのようにピンクは外来語であっても桃色よりも盛んに使われている。「まずは、基本の色み（白、赤、黄、緑、青、ピンク）のチェック」の例にもピンクだけは外来語にされた。

2. 青、緑、茶色は外来語のと比べて数が少ないが、使い方から見ると、紫、金色、銀色と違い、具体的な色の話や自然のものの場合だけでなく洋風のものの色を表すときにも使われる。マスカラ、アイライナー、パウダーなどのようなアイテムにおいては桃色、灰色、金色、銀色、紫を使ったら不自然だとかおかしいと感じられるかもしれないが、青、緑、茶色使ったらそういう語感がしないようである。そのため、青、緑、茶色とブルー、グリーン、ブラウンとの間に語感の違いはあまりないだろうと思う。イエローと黄色の使い方にも同じ傾向が見られるが、使い方の頻度がほぼ同じである。

3. 白、黒、赤のほうは外来語のよりもよく使われているのはそれらの語はもっと若者に親しみのある色彩語と思われるからであろう。日本語の伝統的な基本的色名は白、黒、赤、青しかないであることと関係があるかもしれない。在来語と外来語との類義問題には一般的に外来語の方が明るい、新鮮、強い、若者言葉だという語感を持つ傾向があるのですが、色彩語に関する類義語には違う傾向が見られる。つまり、全ての外来語の色彩語は共通する語感を持っていない。

この調査はただ女性誌における色彩語の使い方を見て、分析するだけのため、他の出版物とかテレビ放送には違う傾向が見つかるかもしれない。話し言葉においても年齢や学歴や職業などの違いがあるので人によって言葉の選択が違うからまた別の傾向があると思う。

ピンクのケースのように、桃色よりも盛んに用いられるのは「桃色」が持つ語感の中にはポルノ的な連想が強いのか桃色は日本人にもう使われなくなってきたかと言う様々な理由があるからか、それを確かめるのにはまた別の調査を行わないといけないと思う。その調査が行われたら桃色と同様、何らかの特別な語感や連想を起こす性質を持つ色彩語が他にもあったり、もしかしたら「ピンク」と「桃色」などとは指している色の内容は同じではない可能性もあつたりするいろいろな結論が出るかもしれないから、色彩に関する類義語の問題は非常におもしろいと思う。

参考文献

石野博史「現代外来語考」、大修館書店、1983

西尾寅弥「現代語彙の研究」、明治書院、1988

国立国語研究所「類義語の研究」、秀英出版、1965

森田良行、村木新次郎、相澤正夫「ケーススタディ日本語の語彙」、おうふう、1994